賀茂別雷神社の役大工と日常の活動について YAKU-DAIKU AND THEIR DAILY WORK AT KAMOWAKEIKAZUCHI SHRINE

中西大輔*, 日向 進**
Daisuke NAKANISHI and Susumu HYUGA

This paper reports on how carpenters worked at Kamowakeikazuchi Shrine in the Edo period. Carpenters at Kamowakeikazuchi Shrine were divided into three levels. The highest level was Daiku, followed by Toryo, and Cho. Concerning this, the following three points became clear: (1)Daiku and Toryo were exempted from carpenters' obligation to Nakai family. (2)Daiku received the contracts for construction at Kamowakeikazuchi Shrine, and if more carpenters were needed, Toryo and Cho also took part in the construction. (3)If a carpenter at an upper level was unavailable, another carpenter at a lower level filled in for him.

Keywords: Kamowakeikazuchi Shrine, Carpenter, Employment, Nakai Family

賀茂別雷神社, 建築工匠, 雇用, 中井家

1. はじめに

すでに13世紀末には、賀茂別雷神社において特定の建築工匠たちが建物の作事を手掛けていた^{注1)}。この作事とおして、賀茂別雷神社の建築に関する知識が建築工匠たちに代々伝えられていった。そのため、江戸時代の幕府による造営で入札制度がとられるようになっても、一部の建築では、日常的に賀茂別雷神社で作事を手掛けていた建築工匠たちによって造営が行なわれていた^{注2)}。

造営に関する史料をみると、賀茂別雷神社で作事を手掛けていた建築工匠たちは、嘉元度の造営において大工・長・連、近世には大工・棟梁・長という階層組織をかたちづくっていた^{注3)}。さらに、大工は正大工と権大工に分けられ、正大工が率いる建築工匠集団と権大工が率いる建築工匠集団に分けることができる^{注4)}。本稿では、史料上の呼称をもちいて、上賀茂に住む建築工匠のうち、大工・棟梁・長を務めている建築工匠を役大工、残りの建築工匠を平大工と呼ぶことにする。

階層組織が「正」「権」2つに分けられていることによって、賀茂別雷神社で行なわれる儀式も独自の方法で展開した。賀茂別雷神社の役大工が、正大工のグループと権大工のグループごとに別々に、あるいは共同で儀式を執り行っていた^{注5)}。

賀茂別雷神社で階層組織を形成していた建築工匠たちが幕府による造営時以外にはどのように活動を行っていたのか。本稿では、この点についてみていくことにしたい。賀茂別雷神社の日次記^{注6)}から知られる役大工の活動のうち、建築工匠としての活動を、①公儀作事への動員、②賀茂別雷神社の作事、③作事以外の仕事に分けて、順に検討していくことにする^{注7)}。

2. 公儀作事への動員

2.1. 中井家による支配

江戸時代、畿内・近江の6国で暮らす建築工匠は中井家によって支配されていた。江戸時代初期に中井家が6国の建築工匠を支配する過程についての研究^{注8)}によると、中井家の配下となった建築工匠は御所の造営など公儀作事に動員され、また中井家一組頭一建築工匠という伝達経路ができあがっていたという。

上賀茂の建築工匠も中井家の支配下に組み込まれていた。上賀茂の建築工匠は、権大工が組頭を務める平松組に属していた^{注9)}。そのため、権大工から公儀作事への出仕要請がくることがあった^{注10)}。延宝3年(1675)には、2か月ちかい交渉のすえ^{注11)}、中井主水からの出仕要請にあたり、賀茂別雷神社および「大工中ヶ間」の間でそれ

* 京都工芸繊維大学大学院 大学院生

** 京都工芸繊維大学工芸科学研究科 教授・工博

Graduate Student, Kyoto Institute of Technology
Prof., Kyoto Institute of Technology, Dr. Eng.

ぞれ寄合が開かれ相談が行なわれた^{注12)}。大工仲間の寄合では、色々吟味仕候処ニ、当所諸役御免除之旨、御 朱印歴然之上ハ、縦令於御公儀御断雖申上候、多分理分ニ可被仰付奉存候へとも、然ハ京都ノ細工仕間敷由万一被仰付候へハ、如何ニ而候、先迷惑仕候間、此度ハ出可申ニ決定仕候旨申上候（略）

と、諸役免除の朱印状があるうへは、公儀作事への出仕を断ることに問題はないといいつつも、出仕することに決定している^{注13)}。理由は、京都での作事を禁止されることを恐れたためであった。また、中井家に対する賀茂別雷神社からの返答の理由は先例があるというものであり（「前廉も御公儀役ニ出申由無紛通ニ御座候へハ」）、出仕要請に「如何様共御指図次第」参加させると回答している^{注14)}。

2.2. 役大工の序列による免除

ただし、正大工・正棟梁・権棟梁を務める3人の建築工匠については、公儀作事が免除されていた。このことは、延宝3年（1675）の中井主水からの書状^{注15)}で確認できる。はじめは上賀茂の建築工匠全体に対する要請であった^{注16)}。しかし、交渉のすえ、正大工・正棟梁・権棟梁を務める建築工匠の動員は免除されることが、中井主水によって決められている^{注17)}。宝永6年（1709）の動員のときにも、

正大工并棟梁式人（正棟梁・権棟梁）者、社用相勤申候故、御所向之普請御免也

とあるように、公儀作事を免除された理由として、「社用」を勤めていることがあげられている^{注18)}。なお、この延宝3年に発行された中井主水の書状によれば、

主水殿より書中ニも正・権大工・棟梁（正棟梁・権棟梁）以上四人ハ可被除由申来

とあり、権大工も免除されているようである。しかし、これまでの諸研究^{注19)}にもあるように、権大工清右衛門は平松組の組頭として幾度となく公儀作事に参加している。また、これ以降日次記のなかで中井家による公儀作事への動員免除に関しては、正大工・正棟梁・権棟梁の3人について言及されている。したがって、原則としては大工・棟梁を務める建築工匠たちが公儀作事への動員を免除される対象であったが、平松清右衛門は公儀作事に出仕していた。権大工清右衛門は役大工のなかでも異質な存在であったといえる。

一方、長を務める5人の建築工匠は公儀作事への動員を免除されなかった。賀茂別雷神社と建築工匠は、大工・棟梁を務める3人の建築工匠に加え、長を務める5人の建築工匠も含めて公儀作事への動員免除を願い出ている。延宝3年（1675）に中井家から公儀作事への出仕要請^{注20)}がなされたときは、「大工仲間」の寄合で、正長・権長の動員も免除されるようお願い出ることに決定したことが記されている。これをうけて賀茂別雷神社も中井主水あての書状を認めている。長を務める5人の建築工匠も免除されるべき理由として、寛永度の造営において「上様より」拝領物および装束をもらったことが挙げられている。しかし、中井主水が同意せず、賀茂別雷神社と中井家の折衝役を務める人物からの忠告もあり、神社で相談のうへ、結局京都に出向き「普請役」を勤めている^{注21)}。

2.3. 動員中に行なわれた課役の扱い

上賀茂の建築工匠たちは、このような中井家による動員のほかに、賀茂別雷神社からの課役も負担していた。日次記によれば、課役には5月の競馬会のため4月末に行なわれる棧敷の設営および7月の御戸代会神事のため6月末に行なわれる能舞台の設営があった。

宝永6年（1709）、公儀作事への動員が、競馬棧敷の設営と重なった^{注22)}。このときの日次記に、

昨夕京都権大工より申越候者、御所舞台御急キニ候へ共、大工少出来兼申候間、賀茂大工不残罷可出

とあるように^{注23)}、動員理由は御所で舞台の作事が急がれていたが人手が足らなかったことにある。そのため、平松組の組頭であり賀茂別雷神社の権大工でもある平松清右衛門から、上賀茂の建築工匠に要請がきたのであった^{注24)}。

その結果、公儀作事を免除された正大工・正棟梁・権棟梁が、とくに多く棧敷の設営に出仕した。これに対して正大工は、課役としての棧敷設営が上賀茂の建築工匠全体へ平等に割り当てられないことを理由に、公儀作事を断ってくれるように希望していた。しかし、（正大工・正棟梁・権棟梁）三人罷出候へハ、出来可申旨也、然者其旨正大工へ被仰付可然ニ付、正大工被召出、右之趣被仰付処、一社之仰次第畏入候旨申ニ付、中井氏へ断ニ不及者也

とあるように、神社側で相談の結果、これまでから免除されていた正大工・正棟梁・権棟梁を務める建築工匠だけで競馬会の棧敷を設けることができるということになり^{注25)}、決まり通りに残りの建築工匠が公儀作事に出ることになった^{注26)}。

そしてこの場合には、競馬棧敷の設営は課役とは違う扱いをうけた。公儀作事への出仕は課役とみなされ、課役の日数を超えて競馬棧敷の設営に出仕したものにはそのぶんの作料が支払われている^{注27)}。

2.4. まとめ

上賀茂に住む建築工匠たちは、中井家の支配下におかれていたため、ほかの建築工匠と同様、公儀作事に参加することが義務づけられていた。しかし、役大工のうち、大工・棟梁を務める建築工匠は賀茂別雷神社の社用を勤める必要があるとの理由から、公儀作事に参加することが免除されていた。ただし、当時の権大工は京都に住む平松清右衛門であり、実際に免除されたのは正大工・正棟梁・権棟梁の3人であった。

3. 賀茂別雷神社の作事

3.1. 序列による作事量の違い

幕府による造営では役大工全員が参加するのに対して、賀茂別雷神社における日常の作事では、作事を割り当てられる度合いが階層組織の地位によって異なっていた。このことは、宝永4年（1707）の正棟梁・権棟梁による訴状に要約されている^{注28)}。

社頭御社中御普請大工職之儀者、正大工・正棟梁・権棟梁相勤申候、其上人数大勢入候時ハ、長五人御座候、是も次第ニ罷出、細工相務申候儀ニ御座候処ニ（略）

これによると、賀茂別雷神社で「細工」があるときには、まず正大工が出し、正大工1人で手が足りなければ2人の棟梁たちも作事に参加するというものであった。さらに、正大工・正棟梁・権棟梁で間に合わないときには、5人の長が、これまた階層組織内の地位の順によって作事に参加していた^{注29)}。ここで、権大工が除かれているのは、権大工は京都に住み、京都で仕事をしていたためであろう。

このため、賀茂別雷神社の作事は正大工に任されることが多かった。このことは、ほかの役大工によってもある程度認められていた。延宝5年（1677）の訴訟にも、「勿論工数少分之時ハ正大工壹人ニ被仰付候共、毛頭申分無之候」^{注30)}とある。実際、寛文5年（1665）か

ら延宝5年までの神社で行なわれた作事をみると、正大工によって行なわれる作事は全体の7割をこえている^{注31)} (図1)。

図1 賀茂別雷神社における日常の作事を請負う建築工匠の比率^{注32)}
(寛文5年から延宝5年まで)

3.2. 正大工による作事の差配と独占傾向

そもそも、正大工が賀茂別雷神社から一元的に仕事をうけ、見積りを行なったうえ、建築工匠を手配していた。宝永4年(1707)に正大工から提出された口上書には次のようにある^{注33)}。

御社中様御用之儀者不限多少ニ、先正大工江被仰付、積り等仕差上、其上ニ而御指図ヲ承り、少之儀ハ私方ニ而細工仕り候、多ク有之時ハ役之大工へ此方より申渡シ来り候、私より外之者ニ直ニ御用承候儀ハ、以前より無之候間、向後も有来候通ニ私家へ被仰付、御用之多少次第第二兩人江も申渡候様ニ奉願候

すなわち、これまで賀茂別雷神社で作事が行なわれる場合、

- ・作事の規模によらず、正大工へ連絡がいき
- ・見積りなどを行なったうえ
- ・神社による指図のもとに

作事が行なわれていた。作事の規模が小さい場合、正大工のところで処理されていたが、大がかりな作事の場合にはほかの役大工が呼び寄せられた。これらの建築工匠を集めるのも正大工の役割であった。

このような方式のため、地位によって順次作事に参加するという原則にもかかわらず、正大工が賀茂別雷神社の作事を独占するという面がみられる。とくに、延宝5年(1677)、元禄3年(1690)、宝永4年(1707)には、正棟梁・権棟梁から訴訟が起こっている。たとえば、延宝5年の訴訟^{注34)}によれば、

社頭其外社中より之御普請、毎度正大工壹人へ被仰付、縦如何程工数入申共、悉左衛門方より出し申候とあり、当時賀茂別雷神社から依頼される作事は、工数がどれだけ必要であろうと、正大工左衛門のところの建築工匠だけでまかなわれていたという。

大がかりな作事においても、正大工は規定に従わず、正棟梁と権棟梁を雇わないことがあった。このような事態に対して宝永4年に正棟梁と権棟梁から提出された口上書^{注35)}には、

近来、正大工我俣ヲ捌、内縁有之者を雇候歟、或ハ心俣ニ平大工ヲ雇、右正・権ノ棟梁ハ曾而雇不申候由ニ付、御訴訟申上候とあり、正大工が頻繁に縁者とともに作事に出仕していたことがわかる。また口上書のつづきによれば、宝永4年までに、複数の鳥居修理に平大工が参加していたことがわかる(表1)。

3.3. 賀茂別雷神社による作事割り当てへの対処

正大工の独占を抑制するのにもっとも単純な方法として、賀茂別雷神社が作事に参加する建築工匠を指名する方法があげられる。延宝5年(1677)には、評議所文庫の作事にあたり、正棟梁・権棟梁から訴訟が起こっている^{注36)}。

大分入申れも正大工斗へ被仰付事迷惑ニ奉存候、此度ハ此兩人へも被仰付可被下、其上先年評議所相立申れ、左衛門・我等以上三人仕立申候、其例令申旁以此度之義訴訟申候云々

当時、正大工が賀茂別雷神社の作事を独占していたことに対するもので、訴訟の内容は、

- ・大がかりな作事まで正大工に独占させておくことは不都合
- ・正大工から参加要請がない
- ・神社から要請をうけた先例がある^{注37)}
- ・その先例をもとに神社に参加を願い出る

というものであった。

元禄3年(1690)にも、鳥居の根継に正大工が勝手に建築工匠を雇ったため、正棟梁・権棟梁から苦情がでている^{注38)}。このときは賀茂別雷神社によって、正大工の雇った建築工匠は降ろされ^{注39)}、役大工が登用されることになった。

独占に対処するもうひとつの方法は、入札を行なうというものであった。延宝5年(1677)の正棟梁・権棟梁による訴訟の結果^{注40)}、

とかく此度文庫之事、当所大工中へ悉被申渡、入札被申渡可然、猶明日被召寄、仕様具ニ被申付、早々入札可仕由可被申渡決定すなわち、評議所の文庫作事は、上賀茂の建築工匠全体に知らせ、詳しい仕様を伝え、入札を行なうことになった。

以降、日次記に記される賀茂別雷神社の作事は入札が多くなり、正大工以外の建築工匠が落札することが多くなったといえる。さらに、この年に行なわれた小規模な修理に必要な以上の建築工匠が出仕したことについて、

少分義ヲ大勢参集之事不可然候、とかく正大工・棟梁兩人(正棟梁・権棟梁)程可参之由可被申渡候、其上於向後ハ工数廿人も入可申普請有之ハ、所詮入札ニ被申付可然決定

と、直営か入札かを定める基準として、工数が20を超える「普請」の場合には入札することに決定している^{注41)}。

日次記に記されている入札の事例を比較することで、入札の基準が決められたことによる請負方式の変化をみてみたい。

- ・日次記の残る寛文5年(1665)から訴訟の起こる前年延宝4年(1676)まで
- ・訴訟の起こった延宝5年から元禄元年(1688)まで
- ・そして参考のために、元禄2年から元禄13年まで

の12年間毎で比べることとする。こうすることで入札の比率だけでなく、件数も含めて比較することができる。3つの期間をみると、延宝5年から元禄元年までの12年間、特に入札の値が増えている(図

表1 鳥居の修理にみる建築工匠の参加状況

年	当初出仕した建築工匠	棟梁の参加状況
元禄3年	正大工と新三郎 ^{注1)}	なし ^{注2)}
不明 ^{注3)}	正大工と平大工	後日より参加
宝永4年	正大工と平大工	正棟梁は後日より参加 権棟梁へは依頼連絡なし ^{注4)}

注1 新三郎は、役大工ではないため、平大工となる
注2 次からは「役ノ大工共」に依頼するとある
注3 宝永4年の記事に「先達而」とあるだけで正確な年月はわからない
注4 正大工の言い分によれば、正棟梁は最初から参加したという

2)。寛文5年から延宝4年までの12年間には2度しか入札が行なわれなかった。これに対し、延宝5年から元禄元年までの12年間をみると、入札は7回も行なわれ、割合は全体の10%を上まわっている^{注42)}。しかし、元禄2年から元禄13年までの12年間には3度と入札の件数は再び減少し、比率も延宝4年以前と同じ程度になっている。入札によって建築工匠を選ぶという方法は、充分なものではなかったようである。宝永4年の訴訟^{注43)}からも、「ヶ様ニ我俣斗」とあるように、独占傾向がつづいていたことがわかる。

図2 請負方式の比率^{注44)} (寛文5年から元禄13年まで)

賀茂別雷神社が建築工匠を指名するという方法については、指名されなかった建築工匠から不平がでている。元禄5年(1692)には、正大工の独占ではないものの、不平等という観点から訴訟が起こっている^{注45)}。経緯は不明だが、片岡社箱棟の修理が正大工と正棟梁に任されることになっていた。これに対して、権棟梁から「我等一分ノ役目ニ而」、上賀茂の建築工匠全体に作事を依頼してくれるようにという訴状があがった。これをうけて賀茂別雷神社では、

- ・今回の作事は正大工と正棟梁の見積りによるものであるため、当初の予定通り正大工と正棟梁に作事を任せる
- ・次回からは「賀茂大工仲間」に対して作事を依頼する

という決定を下している^{注46)}。

同様に、正大工の独占傾向を止められなかった原因のひとつとして、入札をとりしきっていたのが正大工であったことが考えられる。入札が行なわれるときには、入札の仕様帳などが正大工に預けられている^{注47)}。入札の見積りを正大工が行なっている例もくりかえしみられる。状況を詳しく知っているということは正大工にとって都合がよかったと思われる。

宝永4年(1707)、たびたび訴訟が起こされた結果、賀茂別雷神社から工数による作事参加の方法が新たに提示された^{注48)}。

- 一、正大工父子
- 一、権大工
- 一、^(正)棟梁
- 一、権棟梁
- 一、長五人

右次第ニ可罷出、当病・故障雖有之、不可用名代

(略) 少々ノ御普請ニハ正大工親子罷出相務、多ク罷出ル時ハ右書付之通罷出可務之、以名代相勤候義堅不罷成義也、当病・故障之時ハ勿論之義也、縦私用にて不参仕ル時ハ其次座ノ者段々ニ罷出、相務ニ極畢

とあるように、原則はこれまでと同様、役大工の地位順に勤めるように、というものであった。加えて、地位による出仕を厳密にし、

どのような理由があろうと代理を出すことは認めず、本人が出られないときは次の地位にある者ができるように決められている。さらに、これまでと異なり、正大工には「第一ノ御大工」^{注49)}としての優位が認められ、作事の規模の大小による基準も示されることになった。必要な建築工匠が5人までのときは、正大工の才覚で建築工匠を使ってもいいが、必要な建築工匠が5人を超える場合には、棟梁たちが出仕するという規定が新たに増やされている。

3.4. まとめ

賀茂別雷神社の作事は、正大工を務める建築工匠がとりしきっていた。規模が大きい場合は、その規模に応じて順次棟梁・長を務める建築工匠を作事に加える義務があった。にもかかわらず、正大工の独占傾向がつよく、たびたび棟梁を務める建築工匠たちから訴訟が起こされている。この訴訟は、宝永4年(1707)に新たな規定が加えられたことによって、ひとまず終了している。

宝永4年までの内規によると、神社の作事には、まず正大工が出仕し、複数の建築工匠が必要になるときは正棟梁・権棟梁が出仕、さらに大人数の作事であれば5人の長が順に出仕することになっていた。その後、工数による規定が加えられた。工数が5までの小規模な作事は正大工親子たちに任せられ、縁者や平大工を自由に使うことができるようになった。これに対して、工数が5以上になる大規模な作事のときには正棟梁・権棟梁・5人の長たちも適宜出仕することになった。

4. 作事以外の仕事

4.1. 仕事の内容

役大工の仕事は作事だけではなく。例えば正徳元年(1711)には、年末・年始の社用(「恒例之御神役」として、

- ・神主・正祢宜・田口へ渡す俎板に清匏をかけること
- ・貴布祢で用いる幣串を調進すること
- ・湯屋の升を調進すること
- ・年頭の新始め^{注50)}
- ・神前の御札改め

があり、これらの社用は基本的に正大工が勤めていた^{注51)}。

4.2. 仕事の代理

正徳元年には、

来正月六日迄故障ニ付、当月末(略)名代(名前略)出シ申度ノ旨也、且又今度神前之御札御改之御用、同前ノ事

というように、一時的に用を勤めることができないため、代理の建築工匠を出したいという願の書付が正大工から提出されている^{注52)}。これに対して賀茂別雷神社は、「此度故障ノ内神用権大工へ可申付、断ノ品於有之ハ正棟梁へ可申付、調進物ノ義ハ有来通正大工方より可出之」すなわち、

- ・「神用」は階層組織の順にしたがって適切な建築工匠が勤める
- ・調進物は従来通り「正大工方」から出す

という結論を下している。「神用」については、先に述べた宝永4年(1707)の決定をもとにいかなる理由があろうとも名代は認めず、

- ・正大工が出仕できないときは、権大工が出仕する
- ・権大工が出仕できないときは、正棟梁が出仕する
- ・正棟梁が出仕できないときは、権棟梁が出仕する
- ・権棟梁が出仕できないときは、長が出仕する^{注53)}

というように、順にくりあげて出仕するようにとの見解を示している。

その結果、正徳元年（1711）12月18日に神社で行なわれた札改めおよびその準備は正棟梁が行なっている。同様に、正徳2年1月4日の新始めも正棟梁・権棟梁・長が出仕している。なお、決まりによれば正大工の代わりは権大工が勤めるべきである。事実、権大工が正大工から連絡をうけ、賀茂別雷神社へ出向いている^{注54)}。

権大工来而申候ハ、十八日、神前之御札御改被成候間、早朝より可相詰之由正大工より申渡候ニ付、御請ニ参上申ノ旨也
此度従御公儀渡り候御札板節有之ニ付、此間市郎兵衛へ被仰付、埋木・削等も大形出来之由也（略）明日、清カンナ当申斗ニ成申ノ由也（略）権大工勤に尤也、然トモ被仰渡雖有之、無其沙汰、至今日、十八日ニ相詰斗ノ事ヲ申も此間ノ御用相勤候正棟梁甲斐も無之、然トモ道理之旨を以被仰付候ハ明日より権大工罷出可勤旨也、去ナカラ此者雖役家細工難成也、然上者此度ハ正棟梁へ権大工ヨダツノ了簡ニテ其俣正棟梁相勤候様ニ被仰付可然とあるように、正徳元年12月18日に行なわれる「神前之御札御改」を権大工が勤めなかったのには、

- ・「札」には、公儀から渡されたとき、節があったため、正棟梁が埋木や削りなどを行ない、あとは清匏をあてるだけである
- ・正大工が神社に願い出してから3日後になって、権大工が2日後に来ると申し出た（その後、翌日から出勤するといっている）
- ・これまでの下準備をした正棟梁にとって甲斐がない
- ・権大工の技能が低かった

という事情があり、今回の「札改め」は、「権大工ヨダツノ了簡ニテ」そのまま正棟梁が勤めることになっている。

4.3. まとめ

階層組織の地位が出仕の順番として使われたのは、作事だけではなかった。年頭に行なわれる新始めや神事に用いる道具の作製にも、やはり階層組織にもとづいた決定が行なわれていた。

5. おわりに

本稿では、賀茂別雷神社で作事を手掛けていた建築工匠である役大工の活動形態を示した。役大工は

- ・大工・棟梁が公儀作事への参加を免除される
- ・地位に準じて優先的に賀茂別雷神社の作事に参加できる

という特権をもち、社用や年頭の新始めにもこの原則が用いられていた。ただし、当時の権大工は京都に住む平松清右衛門であり、公儀作事への免除に関しては対象外であったようである。

階層組織のうち上位のものは公儀作事の義務を免除され、社用に専念していた。課役と重なった時には、公儀作事を免除された大工・棟梁を務める建築工匠たちが課役を担当し、残りの建築工匠たちが公儀作事に仕出た。公儀作事は課役と同等のものとみなされ、課役の日数をこえて課役に従事した建築工匠には作料が支給された。

賀茂別雷神社の作事もまた、階層組織の地位によって参加する方法がとられていた。そのため、正大工は独占的に活動を行なっている。このことに対して、ほかの建築工匠からたびたび訴訟が行なわれ、対応が考えられたが充分なものとはいえなかった。宝永4年(1707)に、これまでの、地位によって建築工匠が出仕していたことに加え、具体的な工数によって作事量をコントロールするという改善が行なわれた。これは、正大工がほかと比べて多くの建築工匠を抱えていた

であろうことにも考慮を加えた対処であったといえる。これによって、正大工の独占傾向に対する一連の訴訟は一応の解決をみている。

さらに、社用や年頭の新始めなども階層組織の地位によって、下位の建築工匠が上位の建築工匠の代わりをすることがあった。

以上、寛文5年（1665）から正徳元年（1711）まで、賀茂別雷神社における建築工匠の活動を検討した。その結果、賀茂別雷神社の建築工匠は、造営時の役割と対応する階層組織の序列にのっとって日常的に活動を行なっていたことがわかった。

注

注1) 赤松俊秀「座について」『史林』第37巻第1号、史学研究会、1954年2月）によれば、永仁4年（1296）の時点では、上賀茂に住む22人の建築工匠と京都に住む4人の建築工匠からなっていた。

さらに、嘉元度造営に関する『嘉元三年御造営記』（IV-A-40）『賀茂別雷神社文書』をみると、「京番匠」4人と「御社番匠ニ不入賀茂番匠」5人により詳しく分けられている。（ ）内の数字は『賀茂別雷神社文書目録』（京都府教育委員会、平成15年3月）による。『嘉元三年御造営記』については、須磨千穎「賀茂別雷神社『嘉元三年御遷宮記』」『賀茂文化研究』第四号、賀茂文化研究所、平成7年12月）において、別の写本が翻刻されている。

なお本稿では、一般の意味での大工と、階層組織の名称としての大工を区別するため、一般の意味での大工のことは、建築工匠と呼ぶことにする。ただし、大工技術という言葉については、建築工匠技術とはせず、大工技術という言葉を用いている。また、「普請」や「細工」なども「作事」として統一した。ただし、具体例などでは「新造」や「修理」という言葉とともに「普請」や「細工」という言葉も「 」をつけて用いている。

注2) 江戸時代の造営において、一部の建築が賀茂別雷神社の役大工によって新造されていた理由として、

- ・本殿・権殿・貴布祢奥社の造営には秘伝があること
- ・この秘伝を他の建築工匠に伝えることは難しいこと

が紹介されている（谷直樹・植松清志・大上直樹「近世における上賀茂神社の造営と大工について」『平成18年度日本建築学会近畿支部研究報告集』、2006年5月、谷直樹「遷宮と造替」大山喬平監修、石川登志雄・宇野日出生・地主智彦編『上賀茂のもり・やしろ・まつり』思文閣出版、2006年6月）。なお本稿でいう賀茂別雷神社の造営とは、幕府によるものを指すこととし、作事とは区別している。

注3) 大工・長・連は、大工・引頭・長・連が登場するまで行なわれていた階層組織として知られている（大河直躬『大工・長・連』組織についてⅠ』『建築史研究』29、1961年3月、同『大工・長・連』組織についてⅡ』『建築史研究』30、1961年10月、同『番匠』法政大学出版局、1971年5月）。

注4) 嘉元度の造営において、「正」・「権」の別は大工にだけみられたが、江戸時代になると、棟梁・長にもみられるようになった（中西大輔・日向進「賀茂別雷神社役大工と大徳寺」『日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）』、2009年8月、同「賀茂別雷神社役大工の編成」『日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』、2011年8月）。

注5) 中西大輔・日向進「賀茂別雷神社の役大工と儀式について」『日本建築学会計画系論文集』第77巻第671号、2012年1月

注6) 『賀茂別雷神社文書』（賀茂別雷神社蔵）。以下、日次記を参照する場合、年月日のみを記す。なお、本稿で用いた日次記は東京大学史料編纂所による。

日次記は賀茂別雷神社の運営に関する日記であり、江戸時代にもたびたび参照されている。詳しくは地主智彦「一紙にても取隠し、あるいは加筆いたし、または少しも写取るまじく候―賀茂別雷神社文書の保管と伝来について―」（大山喬平監修、石川登志雄・宇野日出生・地主智彦編『上賀茂のもり・やしろ・まつり』、思文閣出版、2006年6月）。

注7) 扱う範囲は日次記が残る寛文5年から、建築工匠の活動形態が決定する正徳元年までとする。なお、日次記が寛文5年以降に限られることについて、寛文4年の裁許状との関連が指摘されている。寛文4年の裁許状によって、社司と氏人両者を含む「社家中」が賀茂別雷神社を運営する主体として位置付けられることになり、17世紀前期から中葉にかけて行なわれた社司と氏人の間における相論が決着することになった（前掲注6「一紙にても取隠し、あるいは加筆いたし、または少しも写取るまじく候」）。

また、本稿でも少しふれているように、役大工は課役も負担していた。課役のなかには、建築工匠特有の負担とみなせるものもある。しかし、上賀茂の建築工匠と課役との関係は、課役を行なわなければ上賀茂で建築工匠として活動できないという性質のものであり、営業権に関わる問題に分類できる。

したがって、本稿では、課役を建築工匠としての活動とは考えていない。

注 8) 谷直樹『中井家大工支配の研究』思文閣出版、平成 4 年 2 月

注 9) 延宝 3 年 10 月 16 日条「大工之事吟味有之処、平松清右衛門組下ニテ御公義役勤申候ニ紛無候間、早々出可申」。また、前掲注 8『中井家大工支配の研究』でも、明和 4 年 (1767) 2 月 23 日条に「大工組平松清右衛門組下」とあることが紹介されている。

なお、前掲注 2「近世における上賀茂神社の造営と大工について」、「遷宮と造替」で、権大工清右衛門は、平松組の平松清右衛門に比定されている。

注 10) 延宝 3 年 9 月 23 日条、同年 10 月 16 日条、宝永 6 年 4 月 27 日条。この、延宝 3 年 9 月条によれば「先年」にも禁中の「普請」へ出仕要請があったという。

注 11) 最初のうちは、神社側は「神用」や「社法」を理由に、何度も断っていた。しかし延宝 3 年 9 月 25 日条によれば、「主水方ニモ五畿内・近江以上六ヶ国ノ大工ハ主水下知ニ可随御朱印有之ニ付、向後ノ姿如何之趣彼方ヨリモ断有之」とあるように、中井主水としても、6 国の建築工匠は中井主水の下知に従うものとするという朱印状を理由に動員を免除することはなかった。そして、延宝 3 年 10 月 16 日条に記される中井主水からの書状によれば、賀茂別雷神社の建築工匠は、「御公義役」を勤めていることに間違いなしとして、動員をうながされている。

注 12) 延宝 3 年 10 月 16 日条。なお延宝 3 年 9 月 25 日条によれば、朱印状に加え、「昔より左様之役義」を勤めていないことを示す証文や「例」もあるという。

注 13) 平井聖『中井家文書の研究』第十巻 (中央公論美術出版、昭和 60 年 2 月、pp. 52-53) によれば、延宝 3 年には内裏において、7 月に立柱、11 月に上棟が行なわれている。また、後西院御所でも 7 月に立柱、12 月に上棟が行なわれている。同書 (p. 34) によれば、平松清右衛門は紫宸殿を担当していた。

注 14) 「先例」については、日次記が寛文 5 年以降のものしか残っていないので、たしかなことは分らない。延宝 3 年 9 月 23 日条によれば、「先年」も禁中の作事へ出仕要請をうけたが、「昔」から「左様之役義」は勤めていないとして賀茂別雷神社へ訴え、断ったということが示されている。延宝 3 年 9 月 25 日条には、公儀作事への動員を断ることについて、「今日又寛文五年七月十一日ニ□□有之、当御代之御朱印、諸役免除ト有之ヲ写 (略) 持参」とある。虫損があり、どのような事例かはわからないが、寛文 5 年にも断ったことだけはわかる。ただし、当時の日次記には公儀作事に関する記事はない。

なお、この結果、掛銭について建築工匠たちは、去年までは「御公義御役」を勤めていなかったため支払っていたが、去年からは「御公義御役」を勤めているため、以後支払わないと主張していることが正大工によって報告されている (延宝 4 年 6 月 15 日条)。

注 15) 延宝 3 年 10 月 16 日条

注 16) 延宝 3 年 9 月 23 日条「清右衛門より切々被申越候而、皆々可罷 □ □」

注 17) 延宝 3 年 9 月 23 日条によれば、一度は「大方不出ニ事済」ことになっている。しかし、延宝 3 年 9 月 25 日条によれば、中井主水から「為内證兎角出シ可給」と言われ、建築工匠の支配に関する朱印状が示されている。これに対して賀茂別雷神社でも公儀作事を免除されるという証文や例・朱印状をもちだし、一進一退を繰り返していたようである。そのようななかで、大工・棟梁の免除は一種の妥協策であったとも考えられる。

注 18) 宝永 6 年 4 月 27 日条。() 内は筆者による。以下同じ。

注 19) 前掲注 8『中井家大工支配の研究』や、前掲注 13『中井家文書の研究』第十巻など

注 20) 延宝 3 年 10 月 16 日条

注 21) 延宝 3 年 11 月 1 日条

注 22) 宝永 6 年 4 月 27 日条

注 23) 平井聖『中井家文書の研究』第五巻 (中央公論美術出版、昭和 55 年 2 月、pp. 3-14)、同第六巻 (中央公論美術出版、昭和 56 年 2 月、p. 8) によれば、造営は、宝永 5 年 9 月に新始め、翌年 7 月に上棟の日時定めが行なわれている。

注 24) 権大工の話によれば、「若無拠断之筋有之者、中井主水方へ断ニ可出」とあり、断るのなら中井家へ直接出向くようにといわれていることがわかる。そもそも、中井家の支配下にある建築工匠にとって、公儀作事への参加要請はやむをえないはずのものである。川上貢『近世上方大工の組・仲間』(思文閣出版、平成 9 年 3 月、pp. 93-94) にも、組頭の職務のひとつとして、公儀作事の分担があげられている。にもかかわらず、権大工が、中井家へ断るように、といったのは、賀茂別雷神社で権大工を務める身としては強硬な態度に出にくかったのかもしれない。

注 25) ただし「若、手つかへ有之而出来兼候ハハ、此時之義ト云々」とあり、棧敷の準備が正大工・正棟梁・権棟梁の 3 人では間に合わない場合、賀茂別雷神社から中井家に対して、動員を断ることも考えられていたことがわかる。

注 26) 宝永 6 年 4 月 27 日条。引用部分前半には、26 日に催された小寄合のなかで、前日の夕方にあった権大工からの出仕の要請について検討されている。そして、「大工共御所普請ニ罷出、今日者正大工老人相勤申候」というように、

一日だけ例外的に正大工を除く建築工匠がすべて御所の作事に出向いている。

注 27) 宝永 6 年 6 月 8 日条

注 28) 宝永 4 年 4 月 2 日条

注 29) 日次記をみても権大工が参加している作事は、寛文 9 年の 1 例のみである。また、正徳元年 12 月 16 日条に、「雖役家細工難成也」とあるように、このころには平松組の組頭でもあった権大工の大工技術が低下していたのかもしれない。組頭の技能が低下していったことは、前掲注 24『近世上方大工の組・仲間』(p. 94) にも寛文・延宝期の例が示されている。

注 30) 延宝 5 年 9 月 19 日条

注 31) このほかに、検分のみが正大工に依頼されている例が数件ある。その後、修理が行なわれたという記述はない。しかし、本文中にもあるとおり、見積りをした建築工匠がそのまま修理を任されたことがある。

なお、権大工が作事に参加している記事は、寛文 9 年 4 月 11 日条にある。そこで、「御修理ニ付、権大工訴訟ニ而明日より大工三人宛入可申由也」と述べられているように、自分から作事に参加することを申し出ている。前掲注 8『中井家大工支配の研究』によれば、平松組の名前はすでに寛永 18 年に清右衛門組としてみられる。寛文 9 年の建築工匠 3 人ずつというのは平松組に属する京都の建築工匠であったのかもしれない。

注 32) 新造・修理などの区別が不明なものは「不明」として分類した。また、社家町にある家屋の破却に伴うもの、社殿の草引き、土橋の幅員拡大、敷地境界の決定、制札の設置・修理、造営の見積りを合わせて「その他」とした。

注 33) 宝永 4 年 4 月 7 日条、宝永 4 年 4 月 5 日付けの口上書

注 34) 延宝 5 年 9 月 19 日条

注 35) 宝永 4 年 4 月 2 日条

注 36) 延宝 5 年 9 月 19 日条。ただし、賀茂別雷神社は入札することに決定している。なお、本文では訴訟を起こした建築工匠を正棟梁と権棟梁としている。これに対して、原文に記された職名は権大工と権棟梁となっている。権大工・同棟梁左介・作兵衛兩人訴訟云 (略) 我等兩人も社役相勤申義ニ候条、御訴訟可仕存候処ニ (略)

しかし、日次記前後のくんだりや造営に関する日記 (造営日記) によれば、左介は権棟梁であり、作兵衛は正棟梁である。「我等兩人」とあることから「権大工・同棟梁」ではなく、正棟梁と権棟梁による訴訟であったことがわかる。

注 37) 原文には正棟梁・権棟梁が参加した「社辺ノ御普請」があると記されている。正棟梁・権棟梁がともに参加した作事を、日次記のなかから探すと、寛文 6 年に行なわれた社家町にある家の解体が挙げられる。しかし、11 年も前のことをさして「此間」というとは思えない。あるいは、日次記に記されている作事は、何らかの基準にもとづいているものだけなのかもしれない。

注 38) 元禄 3 年 8 月 27 日条

注 39) 宝永 4 年 4 月 2 日条

注 40) 延宝 5 年 9 月 19 日条

注 41) 延宝 7 年 8 月 12 日条

注 42) 延宝 7 年には幕府による造営が行なわれて、賀茂別雷神社の建物が新造および修理されている。日次記をみると、延宝度造営以前には、寛文 12 年に 1 件、寛文 13 年に 1 件、延宝 5 年に 1 件入札による作事が行なわれている。さらに、延宝 7 年の造営中に行なわれた入札による作事が 2 件ある。しかし、以上は延宝度造営で修理の対象にならなかった物件の入札である。

注 43) 宝永 4 年 4 月 2 日条、3 月 26 日付けの口上書

注 44) 請負方式が明記されていないものを「不明」としたが、入札の結果が記録されていないことから「直営」の可能性が高いと考えられる。

注 45) 元禄 5 年 1 月 27 日条

注 46) 元禄 5 年 1 月 27 日条。決定内容の後半は「重而又々様ノ御用有之時ハ必中ヶ間一分ニ可被仰付、先此度ハ其分ニ仕候へ」とある。

注 47) 例えば、貞享 2 年 (1685) 10 月 17 日条「文庫仕様帳出来候 (略) 菟角望タル者ハ仕様帳ヲ見テ注文ヲ廿二日ニ可持来旨可被仰付也、故ニ仕様帳別ニ書立、正大工所へ被遣候也」

注 48) 宝永 4 年 4 月 2 日条、同 7 日条

注 49) 宝永 4 年 4 月 2 日条

注 50) 賀茂別雷神社では、毎年 1 月 4 日に社頭と神主亭で新始めが行なわれる。

注 51) 正徳元年 12 月 13 日条

注 52) 正徳元年 12 月 13 日条

注 53) 正徳元年 12 月 13 日条には、正大工当病・故障雖有之、不可用名代、正大工指合有之ハ、権大工可勤之、同指合有之ハ正棟梁可勤之、々様ニ次第二可勤候ノ旨也とあり、長については明記されていない。しかし、これは宝永 4 年の決定に基づくものであり、宝永 4 年には本文でも述べたように長についても「長五人」と記されているため、長も含めたものと考えられる。

注 54) 正徳元年 12 月 16 日条

(2011 年 7 月 10 日原稿受理、2011 年 11 月 16 日採用決定)